

平成 26 年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「プロジェクト型」の共同研究 研究報告書

研究課題名：「戦間期の国際秩序形成におけるソ連の役割：その周縁部の構造と現実」

研究構成員および役割分担：

氏名・所属機関	専門分野	役割分担
シュラトフ ヤロスラフ（広島市立大学）	ロシア近現代史、日露関係・東アジアにおける国際関係史	研究総括（申請者） ソ連極東、日本、中国との関係
長縄 宣博（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）	中央ユーラシア近現代史	研究総括者の補佐、 ソ連の中東への関与
宮崎 悠（北海道教育大学）	ヨーロッパ政治史	西欧、ドイツ、ソ連の狭間の東欧
池田 嘉郎（東京大学）	ロシア近現代史	ソ連周縁部の動態をモスクワの視点から相対化

＊ 研究概要

本研究は、第一次世界大戦後の東アジア、中東、東欧の国際秩序において、ソ連の存在がどのように作用していたのかを、帝政末期とソ連初期との連続性も視野に入れながら、総合的に考察しようとするものである。東欧から中東にかけての空間が帝国の崩壊に伴って国民国家を単位に再編されたのに対して、東アジアでは日本と中国が帝國的な編成を維持しながら国民国家の振舞いをしたという大きな違いはあるが、本研究は東アジア、中東、東欧すべてと接するソ連を中心に据えることで、ユーラシア大陸西端を中心とした国際秩序とは異なる、戦間期の秩序形成の課題を捉えることを目指す。日本では、戦間期の東欧に関しては国民国家建設の観点から研究の蓄積が厚いが、同時期中東については手薄なままであり、極東情勢とその他のアジア地域を比較分析する視座にも乏しい。このために本研究は、一国史観を克服して新しい地域認識を獲得し、かつ西欧中心の国際秩序認識を批判する試みとして、ソ連との関係性という座標軸を設定するのである。

本研究は、扱う空間の広さだけでなく、外交、軍事、民族政策なども統合する視座を採用し、世界秩序の形成とローカルな政治の動態を同時に捉えようとするという特色がある。国内外において関係するあらゆる研究分野の専門家と連携して、お互いにインパクトを与えながら、戦間期の国際秩序形成過程の多面的な様相およびソ連の役割を包括的に検証・分析し、さらなる研究に発展できることを目指す。

＊ 研究成果

1) 研究構成員はスラブ・ユーラシア研究センターにて研究会議を開き、北海道大学図書館で共同研究に関わる資料調査を行った（2014年8月、2015年2月）。

2) 国内の新進気鋭の若手、中堅、ベテランのロシア、東欧、ユダヤ、モンゴル研究者から構成される研究グループ（10人）を結成し、2014年10月に科研費（基盤A）の申請を行った。残念ながら、科研費は不採択になったが、このネットワークを通じて本研究課題をさらに展開させ、新たなスラブ・ユーラシア研究プロジェクトが生まれることを期待したい。

3) 11月、北米のスラヴ・ユーラシア学会（ASEEES）の第46回大会で、サントペテルブルグ・ヨーロッパ大学の Samuel J. Hirst と The Interwar Soviet Union and the Global South というパネルを二つ組織し、そのうちのひとつでシュラトフは“Ideology and Pragmatism in the Soviet Far Eastern Policy”、長縄は“Invitation to Guests of God: Bolsheviks’ Transnational Hajj Enterprise,” という報

告を行なった。

4) 12月初旬、スラブ・ユーラシア研究センターで開催される冬期国際シンポジウムにおいて下記のパネルを企画した：

パネル名：「ユーラシアにおける新秩序の構築：国内外からみたソ連の戦間期外交」

報告：－ 宮崎悠（北海道教育大学）「ポーランドから見たソ連外交政策：E.ローメル『ポーランド統計・地理図（1921）』をめぐって」

－ ヤロスラフ・シュラトフ（広島市立大学）「極東におけるソヴィエト・ロシア：外交政策の新旧アプローチ」

－ アレクサンドル・リフシン（モスクワ国立大学、ロシア）「1920年代におけるソ連の外交政策と世論：「信頼」の問題」

コメンテーター： 池田嘉郎（東京大学）

司会： 長縄宣博（SRC）

このパネルは研究構成員全員が参加し、またロシアのモスクワ国立大学行政学部からアレクサンドル・リフシン（А.Я. Лившин）教授を招聘した。リフシン教授はソ連期の社会政治研究の代表的な研究者であり、『権力への手紙』（1998年、2002年）や『ソヴィエト・ロシアにおける気分と政治的エモーション』（2010年）などの多数の共単著や論文を発表している。フロアからさまざまな質問があり、活発的な議論となった。

5) ロシア史研究会と共同で12月の例会でリフシン教授の発表会を企画した。リフシン教授は「Bridging the Gap: Government-Society Dialogue via Letters」というテーマで報告した。

6) 2015年2月に宮崎は北海道大学大学院共通授業で共同研究に関わるテーマで講義を行った。

7) 2015年2～3月に池田とシュラトフは、英文の論文を執筆し、収集した資料の整理を行なったので、英文校閲や資料翻訳にまとまった支出が発生した。

日本・ロシア・北米・ヨーロッパの研究者と協力体制を構築し、国内外の研究ネットワークを発展しつつある申請者と研究構成員は、2015年8月に幕張で開催される ICCEES 大会で本研究課題に関連するパネルを組織し、また7月末に北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターで学術会議を開催して口頭発表を行う予定である。このプロジェクトで得られた研究成果は、引き続き有益に活用されることが見込まれる。

この機会を借りて、スラブ・ユーラシア研究センターに心より感謝を申し上げたい。